

公開対談シリーズ第6回

まなざし
NINAGAWA 千の目

まもなく彩の国さいたま芸術劇場で上演される、蜷川幸雄演出による『コリオレイナス』で、主人公の運命を左右する強い母親役を演じる予定の女優、白石加代子さん。これまでも数々の蜷川作品に出演して来た白石さんは、蜷川にとって、最も信頼が置ける役者であると同時に、演劇が最も熱かった時代を生きて来た同志でもある。二人が繰り広げる話には、演劇の深さや面白さがたっぷり。味わい深い対談となった。

『コリオレイナス』の地に立ち、
古代ローマに思いを馳せる

蜷川(以降N) 「NINAGAWA 千の目」シリーズ、第6回のゲストは白石加代子さんです。白石さんは1960年代の後半に衝撃的な演劇をひっさげ、演技で世界中を魅了し、ヨーロッパでも名がとどろく優れた女優さんです。現在では『百物語』や朗読劇としての『源氏物語』などを一人でされています。その白石さんからたくさんのお話を聞かせて頂きたいと思っています。白石さんどうぞ。(拍手)

白石さんは今度やる『コリオレイナス』のためだけではないと思いますが、イタリアにいらっしまったのですね。演じるために役に立ちましたか。

白石(以降S) スケールの大きさ、そして掘ればどこでも遺跡が出そうな雰囲気、その遺跡の下にはもっとその前の遺跡があるのだという話をうかがうと、とてつもない国だし、『コリオレイナス』は古代ローマのお話でしょう。だから雰囲気はちょっと分かりました。

N フォロロマーノに行ったわけだ。

S 行きました。その気になっています。

N 主人公になった気分です歩いたわけだ。

S もちろんです。睥睨してきましたから。(笑い)

N ところが、『コリオレイナス』はただ古代ローマのセット、衣装でやるわけじゃなくて、少し日本風にするので京都の石段の方がよかったかもしれないですね。(笑い)

手の内を明かすと、古代ローマの芝居は、この間の『タイタス・アンドロニカス』で似たようなことをやってしまったので、いろいろな彫刻などを使いたくないのです。どうしようかと思って、少し変えようかと七転八倒して、どうい所でイタリア的なものを表せるのかと思った時に、「石の階段だ」と思いました。石段がずっとあるとローマの感じが出ると思ったのです。それを日本的な物の中に入れようかなというのが今度の演出プランなのです。

蜷川幸雄

YUKIO NINAGAWA

(財)埼玉県芸術文化振興財団芸術監督・演出家 蜷川幸雄

埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年も『近代能楽集』ニューヨーク公演、歌舞伎『NINAGAWA 十二夜』、『メディア』、『天保十二年のシェイクスピア』など多数の演出を手がける。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。(財)埼玉県芸術文化振興財団芸術監督。

白石加代子

KAYOKO SHIRAISHI

女優 白石加代子

早稲田小劇場(SCOT)を経て現在に至る。舞台を中心に映像でも活躍。主な舞台出演作品に、『劇的なものをめぐって II』『トロイアの女』『東海道四谷怪談』『パッパの信女』『クリテムネストラ』『悲劇』『桜の園』、現代能『鷹井』、『メアリー・スチュアート』『常陸坊海尊』『ミザリー』『8人で探すリア王』『おやすみ、母さん』『リア王-影法師-』など。蜷川演出作品に『夏の夜の夢』『身毒丸』『ペリクリーゼ』『グリークス』『天保十二年のシェイクスピア』がある。又、連続企画『百物語』『源氏物語』を行っている。『百物語』は海外でも評価が高い。観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞、第1回・第3回読売演劇大賞優秀女優賞、スゴニチ文化芸術大賞優秀賞、芸術選奨文部科学大臣賞など数々の賞を受賞。2005年紫綬褒章受章。07年彩の国シェイクスピア・シリーズ第16弾『コリオレイナス』への出演が決定。

子供の頃から
劇団に入るものと決めていた

N 白石さんは俳優になろうと思ったのはどういう事がきっかけですか。

S 蜷川さんの前でこんなことを話すのははずかしいけど、これはずっと後になって導き出した答えですけど、生まれつき血が騒ぐような子で、今でもテレビにつられて踊り出す子供がいるでしょ。ああいう資質ではないかと思えます。その当時は車もあまり走っていませんでした。道で踊っちゃうのです。そうすると母が心配して、あまり落ち着きがないから日本舞踊を習わせたりしたのです。しかし貧乏でしたので短期間習っただけです。その時のが身体にびたっと張り付いているみたい。それと自己顕示欲が強くて、父親が生きていた時にちやほやされていて、急にいなくなって、どん底になったら誰も自分に注目しないというような時代が来た時に、そこから何かはね除けて、何とか自分に目を向けて欲しいという意識があったような感じがします。そういうことが前提にあって、小学校の講堂で、巡回劇団の芝居を観て虜になり、小さな我が家に近所の子を集めてお芝居ごっこをしたのが最初だと思います。だから芝居は身体を動かして何か楽しいことをするのだと考え、いつか劇団に入るのだとずっと思っていました。でも私の家は母子家庭だったので、弟が高校を卒業した時に、「これで私は自由かな」と思って始めたのが早稲田小劇場です。

N 早稲田小劇場という劇場があって、60年代の終わりの方では衝撃的な演劇を立て続けにやっていました。早稲田の小さな喫茶店の二階ですよ。あの小屋ではお客さんは何人くらい入りますか。

S 無理に詰めても120人くらいですね。私が演じているところにお客さんの顔があるという詰め方です。

N いま演じてと言いながら、体や手をねじっていましたよね。すくくと立たないよね。

S 最初は、ご存知の通り“狂気女優”とか“情念の女優”とか言われていて、わりあい日本の物をやっていました。台本はきちっとあるのですが、狂気の女がこの台本を演じるという二重構造になっていて、すごくすてきな鏡花のセリフを言うのですが、身体は狂っているのです。変なことをするわけですから、ついねじってしまいました。

それはどういうことかという、狂気の女が座敷牢につながれていて、自分の幻想の中に時々入ってってしまうという設定です。幻想の中に入った時は泉鏡花の女系図のセリフなどを言うのです。一番覚えている所は、畳半畳の上に鎖につながれている。そうすると子どもが私に食べ物を運んでくるシーンがあるのですが、突然、私がおもらしをして下の世話をさせるんですね。はいつくばって着物の裾をびゃっとめくってネ。ふと見ると20cm位先のところにお客さんの顔があるんですよ。そういう身体をしながら、「わたし、山百合を買ってきて早く咲くようにつぼみに水を吹いて膨らませておいたのですよ」というセリフを言うのです。だから身体が一番はずかしい格好をしながら、美しいセリフを澄んだ声でうたい上げますから、身体と意識が引き裂かれた感じです。

N こういのは実演ですよ。演劇の魅力の基本的なことでは